

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イタリア語における《N+N》複合語の生成 : Headと語形性レベル
Author(s)	上野, 貴史
Citation	言語文化学会論集 , 7 : 21 - 42
Issue Date	1996-10
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045407">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045407</a>
Right	Copyright (c) 1996 言語文化学会
Relation	



# イタリア語における《N+N》複合語の生成

## —Headと語形成レベル—

上野 貴史

(大阪女子短期大学)

### Sommario

Questo lavoro tratta la struttura generativa del composto con due sostantivi (<<N+N>> composto), compreso i composti con un sostantivo e un aggettivo (<<N+A>> composto) e con un aggettivo e un sostantivo (<<A+N>> composto), messo a fuoco l'elemento flesso di genere e numero. I risultati sono come segue: 1) Il genere del composto concorda con quello della testa. Generalmente la testa del composto italiano succede all'elemento sinistro. 2) Nel composto della testa sinistra, la flessione del numero ha tre tipi: solo <E1>, solo <E2>, e entrambi, mentre il composto della testa destra ha due tipi: solo <E2> e entrambi. Questo fatto indica che l'elemento flesso non è tutto alla testa. 3) Qualche livello nella formazione di parole esiste nel corso da una continuazione sintattica a un composto. Questo livello si riflette sul composto di genere e numero. Si pensa che il composto si formi in due componenti: sintattico e lessicale.

## 1. はじめに

語形成は、一般的に接辞を付加して生成される派生語形成と、独立した語を並列する複合語形成に大きく分けることができる。ロマンス語に属するイタリア語は、多くの接頭辞・接尾辞を持ち、派生語における多様性を示す一方で、英語やドイツ語などのゲルマン語に比べて、複合語形成は未発達の状態にあるとされる<sup>1)</sup>。しかしながら、英語などから借用された外来語、官公庁で使用される省略語、そしてマスコミなどで使用される語彙などの影響により、現代イタリア語においては複合語形成もかなり多く見られる<sup>2)</sup>。このようなまだ完全に定着していないイタリア語の複合語形成には、語彙化における多くの興味深い現象が現れる。そこで本稿では、《N+A》(名詞+形容詞)・《A+N》(形容詞+名詞)複合語と比較しながら、《N+N》(名詞+名詞)の語彙範疇で現れる複合語形成の生成過程を分析する。生成過程の分析には、Head(主要部)とGender(性)・Number(数)の屈折要素に着目し考察する。このことにより、イタリア語における造語・新語生成過程のメカニズムを解明することが本稿の目的となる。

《N+N》複合語を分析するに当たり、今回の考察対象として扱わなかったものについて二点触れておく。まず、*foto-*「光」、*moto-*「自動車」、*-fero*「もたらす・産出する」、*-crono*「時間」など疑似的な接頭辞・接尾辞と考えられるような造語要素<sup>3)</sup>を伴った語形成に関してである。これらは、①独立して現れることがない、若しくはその単一語とは意味が異なる、②先行研究において接辞として扱われていない、③何らかの省略形から生成されているものが多い、という特徴を持つ。このような造語要素を伴った語は、複合語形成の特徴よりも派生語形成の性質に近いということで、今回の分析からは除外する。もう一点は、外来語に関するものである。現代イタリア語には、英語やフランス語からの語彙を翻訳借用するのではなく、原語をそのまま使用している複合語が多く見られる<sup>4)</sup>。これらの複合語は、イタリア語における語形成ではなく、当該言語における語形成であるので、本稿では扱わないことにする。

以上のことを考慮し、本稿では、二つの要素からなる《N+N》複合語を分析対象とする。

## 2. 複合語の範囲

イタリア語の《N+N》複合語の分析を行う前に、まず英語と比較しながら本稿で扱う複合語の範囲を限定していくことにする。複合語に現れる最初の要素を〈E<sub>1</sub>〉、二番目に現れる要素を〈E<sub>2</sub>〉とすると、英語では、(1)のような三種類の綴字で複合語が出現する<sup>91)</sup>。

- (1)      Type 1    〈E<sub>1</sub>E<sub>2</sub>〉            ashtray, catfish, doorknob  
              Type 2    〈E<sub>1</sub>-E<sub>2</sub>〉           wind-bell, window-pane, year-end  
              Type 3    〈E<sub>1</sub> E<sub>2</sub>〉            fire engine, piano keys, sandwich man

英語では、一般的に意味・音韻・形態等の基準を併せ持っているものが複合語とされ<sup>91)</sup>、複合語であるか否かの基準を(1)のような綴字上で区別するのは困難であるとされる<sup>7)</sup>。一方、イタリア語に関しては、綴りの違いが複合語の決定要因の一つとして分析されているものが見られる<sup>91)</sup>。これらの研究においては、(2)のType 1を複合語として扱い、Type 2/Type 3を複合語ではない別の語彙連続として扱っている。

- (2)      Type 1    arcobaleno「虹」, cassapanca「木の長椅子」, cavolfiore「カリフラワー」  
              Type 2    busta-paga「給料袋」, cane-lupo「シェパード犬」,  
                       fondo-assistenza「救済基金」  
              Type 3    cane poliziotto「警察犬」, pacco dono「贈り物の包み」,  
                       treno merci「貨物列車」

Type 2/Type 3を複合語と区別して扱う大きな根拠は、Type 1とType 2/Type 3における強勢パターンの違いにあるとされる。イタリア語の単一語の強勢は、一般的に語末から二番目の母音に置かれる。これと同様、Type 1の形態をとる語は、語末から二番目の母音に強勢が置かれる。例えば、(3)で示したように、*arcobaleno*では、語末から二番目の母音 *-e-* の上に強勢が置かれる<sup>91)</sup>。

- (3) Type 1 arcobaléno, cassapánca, cavolfióre

一方、Type 2/Type 3の形態をとる語は、 $\langle E_1 \rangle$ と $\langle E_2 \rangle$ の各要素の語末から二番目の母音に二か所第一強勢が置かれる。

- (4) Type 2 bústa-pága, cáne-lúpo, fón-do-assisténza

- (5) Type 3 cáne poliziótto, pácco dóno, tréno mérci

例えば、(4)の *busta-paga* では、*busta* の *-u-*、*paga* の語末から二番目の *-a-* に、(5) の *cane poliziotto* では、*cane* の *-a-*、*poliziotto* の語末から二番目の *-o-* の上に二か所第一強勢が置かれる。このように音韻的基準<sup>10)</sup>を重視すると、Type 1 は複合語になり、Type 2/Type 3 は非複合語となる。しかし、このような音韻的基準を無視して、Serrianni(1989)やScalise(1988)などのように、Type 2/Type 3 も複合語として扱っているものもある。ここで、本稿で考察する複合語の範囲を決定するために、Type 2/Type 3 を複合語とは別の語彙連続として扱っているLepschy & Lepschy(1977)とSugeta(1989)の分類を検証してみる。

## 2.1. Lepschy and Lepschy(1977)

Lepschy & Lepschy(1977)では、Type 1 をCompounds、Type 2/Type 3 をJuxtapositionと区別して扱っている。彼らは、各構成要素の文法範疇と文法機能という観点から、Compoundsを、 $\langle E_1 \rangle$ にHeadを持つものと $\langle E_2 \rangle$ にHeadを持つものとに分け、さらにModifierの文法機能の違いから、それぞれ二種類(Complement/Attribute)の下位分類を行っている。また、Type 2/Type 3 のJuxtapositionについては、 $\langle E_2 \rangle$ の位置のModifierの文法機能の違いにより、二種類(Complement/Predicate)に分類している(6)。この分類において、Lepschy & Lepschy(1977)は、HeadとModifierを文法機能の用語として用いているが、彼らが挙げている例から、これらを語形成におけるHead(主要部)とModifier(修飾部)とほぼ同等と考えて問題ないと考えられる。

(6) Compounds : Type 1

Modifier (Complement) + Head

Modifier (Attribute) + Head

Head + Modifier (Complement)

Head + Modifier (Attribute)

Juxtaposition: Type 2/Type 3

Head + Modifier (Complement)

Head + Modifier (Predicate)

この分類において、CompoundsとJuxtapositionの相違点は、二点あると考えられる。一つはCompoundsには、右側の要素である<E<sub>2</sub>>にHeadが出現する場合があるということ、もう一つはHead+ModifierにおけるAttributeとPredicateという用語の違いである。第一番目のCompoundsの右側にHeadが出現する複合語を彼らが挙げている例から分析すると、①ラテン語における複合語、②ゲルマン語系言語からの翻訳借用の複合語、③要素の一つが造語要素、のいずれかで構成されていることが分かる<sup>11)</sup>。①のラテン語における複合語は、現代イタリア語の語形成とはかなり異なっていること、②のゲルマン語からの翻訳借用は、ゲルマン系言語の複合語が一般的に右側主要部となるが、これをその語順のまま翻訳借用していること、③の造語要素については、派生語形成の特徴を有していること<sup>12)</sup>、によりLepschy & Lepschy(1977)で指摘している右側にHeadが出現する例は、イタリア語本来の複合語形成とは言い難いと考えられる。また、JuxtapositionのType 2/Type 3の形態において、*carta moneta*「紙幣」のように、右側にHeadが出現するものも存在することから、右側にHeadを生じる語をCompoundsだけの特徴と位置づけることは不可能であると考えられる。第二番目のAttributeとPredicateの用語の違い<sup>13)</sup>について、Lepschy & Lepschy(1977)では明確な定義を行っていないので、彼らが挙げている例から検証してみる。

(7) a. Head + Modifier (Attribute): *pescecane*<sup>14)</sup>「サメ」, *cavolfiore*

b. Head + Modifier (Predicate): *donna cannone*「大女」,

*discorso fiume*「流暢な演説」

ここで、HeadとModifierの意味関係に注目してみると、(7a)の *pesce cane* は、【cane「犬」のような *pesce*「魚」】、*cavolfiore* は、【fiore「花」のような *cavolo*「キャベツ」】、また、(7b)の *donna cannone* は、【cannone「大砲」のようなく大きな > *donna*「女」】、*discorso fiume* は、【fiume「川」のようにく流れる > *discorso*「スピーチ」】というような意味構造をとっていることが分かる。これらは、すべて【<E<sub>2</sub>>のようなくE<sub>1</sub>>】という構造から生成されており、いずれの<E<sub>2</sub>>も直喩的な表現を表している。これらの例を見る限り、AttributeとPredicateの用語における差異はなく、各要素の意味関係上、Modifierの機能はCompoundsとJuxtapositionにおいて同一であると考えられる<sup>16)</sup>。

## 2.2. Sugeta(1989)

次に、Sugeta(1989)では、Type 2/Type 3をSintagma(統合)として扱い、各要素の意味と機能から大きくApposizione(同格関係)とDipendenza(依存関係)の二種類に分類している<sup>16)</sup>(8)。

### (8) Sintagma: Type 2/Type 3

Apposizione	treno lampo 「稲妻のように速い列車」
Dipendenza	anno luce 「光年」

これらの要素間の意味関係を見てみると、Apposizioneの *treno lampo* は、【lampo「稲妻」のようにく速い > treno「列車」】という構造を持つ。また、Dipendenzaの *anno luce* は、【luce「光」のanno「年」】という意味構造をとる。Sugeta(1989)では、これはType 2/Type 3のSintagmaの構造であると述べているが、同じような構造は、Type 1の複合語にも見られる。

### (9) a. grillotalpa 「ケラ」

### b. cartapeccora 「羊皮紙」

(9a)では、【talpa「モグラ」のようなgrillo「コオロギ」】から *grillotalpa* が生成され、(9b)では、【pecora「羊」のcarta「紙」】から *cartapecora* が生成されている。これらは、それぞれ(8)のApposizioneとDipendenzaの意味構造に対応している。このことから、SintagmaとType 1における要素間の意味構造の類似性を指摘することができる。

以上、Type 2/Type 3を複合語とは別の語彙連続として扱っているLepschy & Lepschy (1977)とSugeta(1989)の検証を行った結果、 $\langle E_1 \rangle$ と $\langle E_2 \rangle$ の意味関係や文法機能において、Type 1とType 2/Type 3の間に明確な差異を見出すことができなかった<sup>17)</sup>。このようなことから本稿では、複合語を「新語形成のために二つ以上の語彙が結合してできた語」として定義<sup>18)</sup>し、英語などと同様、Type 1に加えType 2/Type 3も複合語に含めて考察を行っていくことにする。

### 3. Head と 屈折

次に、《N+N》複合語におけるHeadの位置と屈折形態素の関係について検証する。Scalise(1988)によると、(10)のように、イタリア語複合語のHeadの位置には二種類あり、そのHeadの部分にNumberなどの屈折変化が起こるとしている。

(10) Scalise(1988: 242)<sup>19)</sup>

Head to the left : infl. to the left (Italian)

Head to the right: infl. to the right (Italian)

ここでは《N+N》複合語のHeadと屈折要素との関係について、(10)の記述の妥当性を検証し、4.では《N+A》と《A+N》の語彙範疇からなる複合名詞にまで範囲を広げてHeadと屈折要素の構造を分析していくことにする。

#### 3.1. HeadとGender

Headを「複合語全体の語彙範疇を決定する要素」<sup>20)</sup>として定義すると、《N+N》複合語



においては、各要素が共に<N>という語彙範疇をとるので、品詞レベルでのHeadの位置の決定は不可能となる。ここでHeadを決定する手段として、名詞におけるGenderが重要な要素となる。<E<sub>1</sub>>のGenderを<X>、<E<sub>2</sub>>のGenderを<Y>とすると、左側にHeadをとる構造は(11)のようになり、また右側にHeadをとるものは(12)のような構造になる。

$$(11) \quad \begin{array}{c} [[E_1]_X \quad [E_2]_Y]_X \\ \quad \quad \quad \downarrow \end{array}$$

$$(12) \quad \begin{array}{c} [[E_1]_X \quad [E_2]_Y]_Y \\ \quad \quad \quad \downarrow \end{array}$$

ここでまず、(11)の左側の要素にHeadが現れる構造について考えてみる。男性名詞である語彙範疇を<M>、女性名詞である語彙範疇を<F>で示すと、(11)の構造は(13)のように具現する。

(13) a. <u>Type 1</u> :	centrovasca	「中央に整列した水球競技者」	$[[centro]_M [vasca]_F]_M$
	fondotinta	「ファウンテーション」	$[[fondo]_M [tinta]_F]_M$
	fondovalle	「谷底」	$[[fondo]_M [valle]_F]_M$
b. <u>Type 2</u> :	cinema-sala	「映写室」	$[[cinema]_M [sala]_F]_M$
	grammo-massa	「グラム」	$[[grammo]_M [massa]_F]_M$
	posto-auto	「駐車場」	$[[posto]_M [auto]_F]_M$
c. <u>Type 3</u> :	anno luce	「光年」	$[[anno]_M [luce]_F]_M$
	campagna acquisti	「サッカー選手の移転交渉」	$[[campagna]_F [acquisti]_M]_F$
	città museo	「博物館都市」	$[[città]_F [museo]_M]_F$

(13a)の *fondovalle* は、<E<sub>1</sub>>の要素である *fondo* が男性名詞であり、複合語全体が男性名詞であることから、左側の要素が複合語全体のGenderを決定しているという事を示している。同様に、(13b)の *posto-auto* では、*posto* が男性名詞であることから、全体として男性名詞に、(13c)の *anno luce* では、左側の要素の *anno* が男性名詞という語彙特性を持つことか

ら複合語全体として男性名詞となる。一方、(12)の構造の右側にHeadをとるものには、(14)のようなものが挙げられる。

- (14)    *acquedotto*「水道」 :  $[[acque]_F [dotto]_M]_M$   
          *banconota*「銀行券」 :  $[[banco]_M [nota]_F]_F$   
          *ferrovia*「鉄道」 :  $[[ferro]_M [via]_F]_F$

*acquedotto*は $\langle E_1 \rangle$ の*acque*が女性名詞、 $\langle E_2 \rangle$ の*dotto*が男性名詞の語彙特性を持ち、全体として男性名詞となることから、 $\langle E_2 \rangle$ の要素がHeadを決定していることになる。また、*banconota*では、 $\langle E_2 \rangle$ の*nota*が女性名詞であることから、複合語全体として女性名詞という特性を持つことになり、*ferrovia*では、 $\langle E_2 \rangle$ の*via*が女性名詞であることから、複合語全体として女性名詞という語彙特性を持つことになる。イタリア語において右側の要素にHeadを持つ構造のものは、2.1.で示したようなラテン語での複合語形成や英語・ドイツ語などのゲルマン系言語からの翻訳借用された語に限定される<sup>21)</sup>。

このように、 $\langle N+N \rangle$ 複合語のGenderは、HeadのGenderによって決定される。

### 3.2. HeadとNumber

次に複数の屈折が起こる要素とHeadの関係について考察する。イタリア語の複数形態は、語末の母音交代という屈折変化によって示される。複数の語彙特性を $\langle +pl \rangle$ で示すと、複数の出現の仕方には、(15)、(16)、(17)のような3つのパターンが可能性として考えられる<sup>22)</sup>。

- (15)     $[[E_1]_N [E_2]_N]_N$   
           $\langle +pl \rangle \qquad \qquad \langle +pl \rangle$

- (16)     $[[E_1]_N [E_2]_N]_N$   
           $\langle +pl \rangle \langle +pl \rangle$

$$(17) \quad [[E_1]_N [E_2]_N]_N$$

$$\underbrace{\langle +p, l \rangle \quad \langle +p, l \rangle \quad \langle +p, l \rangle}$$

つまり、(15)と(16)はそれぞれ $\langle E_1 \rangle$ と $\langle E_2 \rangle$ にだけ複数の屈折変化が起こり、(17)は $\langle E_1 \rangle$ 、 $\langle E_2 \rangle$ 両方に屈折変化が起こることを示している。実際に、《N+N》複合語には、これら三つの可能性すべてが存在する。まず、 $\langle E_1 \rangle$ に複数の語彙特性が現れるものとして、(18)、(19)、(20)のようなものが挙げられる。

$$(18) \quad \text{fondovalle} \text{ 「谷底」} \quad \rightarrow \text{fondivalle} : [[\text{fondi}]_M [\text{valle}]_F]_M$$

$$\underbrace{\langle +p, l \rangle \quad \langle +p, l \rangle}$$

$$(19) \quad \text{posto-auto} \quad \rightarrow \text{posti-auto} : [[\text{posti}]_M - [\text{auto}]_F]_M$$

$$\underbrace{\langle +p, l \rangle \quad \langle +p, l \rangle}$$

$$(20) \quad \text{anno luce} \quad \rightarrow \text{anni luce} : [[\text{anni}]_M [\text{luce}]_F]_M$$

$$\underbrace{\langle +p, l \rangle \quad \langle +p, l \rangle}$$

例えば、(18)においては、 $\langle E_1 \rangle$ の要素の *fondo* の語末の *-o* が屈折変化して *fondi* となり複数の語彙特性を示す。同様に(19)の *posti-auto* は、 $\langle E_1 \rangle$  の *posti* が、(20)の *anni luce* は、 $\langle E_1 \rangle$  の *anni* が複数の屈折変化をすることにより、複合語全体が複数の語彙特性を持つことになる。これらはすべて、Headの要素( $\langle E_1 \rangle$ )にNumberの屈折変化が起こっており、Headに屈折変化が起こるというScalise(1988)の主張と合致している。次に、 $\langle E_2 \rangle$ に複数の語彙特性が現れるものとして(21)、(22)の例を挙げる。

$$(21) \quad \text{banconota} \quad \rightarrow \text{banconote} : [[\text{banco}]_M [\text{note}]_F]_F$$

$$\underbrace{\langle +p, l \rangle \quad \langle +p, l \rangle}$$

$$(22) \quad \text{arcobaleno} \quad \rightarrow \text{arcobaleni} : [[\text{arco}]_M [\text{baleni}]_M]_M$$

$$\underbrace{\langle +p, l \rangle \quad \langle +p, l \rangle}$$

(21)の *banconota* は、 $\langle E_2 \rangle$  の *nota* に複数の語彙特性が現れている。(21)は、英語 *banknote*

(23) cartamoneta → cartemonete :  $[[carte]_F[monete]_F]_F$

$\begin{array}{c} <+p1> & <+p1> <+p1> \\ & \underbrace{\hspace{1.5cm}} \end{array}$

(24) cassaforma 「木枠」 → casseforme :  $[[casse]_F[forme]_F]_F$

$\begin{array}{c} <+p1> & <+p1> <+p1> \\ & \underbrace{\hspace{1.5cm}} \end{array}$

以上のようなことから、現代イタリア語におけるHeadと屈折要素の関係は、(10)で示したScalise(1988)の指摘よりもかなり複雑であり、(10)は(25)のように修正されなければならないと考えられる。

(25) Headと屈折の関係

Head to the left : infl. to the $\langle E_1 \rangle$	: posto-auto	→	posti-auto
the $\langle E_2 \rangle$	: arcobaleno	→	arcobaleni
the $\langle E_1 \rangle$ and $\langle E_2 \rangle$ :	pesce cane	→	pescicani
Head to the right: infl. to the $\langle E_2 \rangle$	: banconata	→	banconote
the $\langle E_1 \rangle$ and $\langle E_2 \rangle$ :	cartamoneta	→	cartemonete

- 31 -

るものの三種類存在することになる。また、右側主要部の複合語の屈折変化は、*banconote*のように<E<sub>2</sub>>に起こるものと*cartemonete*のように<E<sub>1</sub>>、<E<sub>2</sub>>の両方に起こるものの二種類存在する<sup>23)</sup>。基本的には、Headの要素とNumberの屈折要素は、一致していると考えられる。例えば、左側主要部の複合語であれば、(18)、(19)、(20)のように<E<sub>1</sub>>にNumberの屈折変化が起こり、右側主要部の複合語であれば、(22)のように<E<sub>2</sub>>に屈折変化が起こる。しかしながら、(21)のように、左側主要部でありながら、<E<sub>2</sub>>に屈折が起こっているものや(23)、(24)のように<E<sub>1</sub>>、<E<sub>2</sub>>の二つの要素に屈折が起こっているものも存在する。このようなことから、《N+N》複合語のHeadと屈折変化の起こる要素には、ある一定の関連性があるということを指摘できる一方で、この関係は絶対的なものではなく、屈折変化の位置はHead以外の要因からも決定されていると考えるのが自然であろう。そこで、次に《N+N》複合語における複数形態の屈折原理を説明するために、《N+A》と《A+N》の語彙範疇からなる名詞複合語について検証してみる。

#### 4. 《N+A》・《A+N》複合語

イタリア語において、形容詞と名詞の語彙範疇からなる名詞複合語には、(26)と(27)のような二種類の構造が存在する。

(26)     [[E<sub>1</sub>]<sub>A</sub> [E<sub>2</sub>]<sub>N</sub>]<sub>N</sub>

(27)     [[E<sub>1</sub>]<sub>N</sub> [E<sub>2</sub>]<sub>A</sub>]<sub>N</sub>

(26)は、複合語全体の語彙範疇が<E<sub>2</sub>>と同一であるため<E<sub>2</sub>>がHeadとなり、(27)は逆に<E<sub>1</sub>>の語彙範疇が複合語全体の語彙範疇を決定しているのでHeadが<E<sub>1</sub>>となる。イタリア語にこの二種類の構造が存在するのは、形容詞を伴う名詞句(NP)に二種類の構造があることと一致している。イタリア語における形容詞は、名詞を後位修飾するのが一般的であるが、日常頻繁に使用される高頻度の形容詞は、名詞を前位修飾する<sup>24)</sup>。したがって、《A+N》の複合語の<A>の位置に現れる形容詞は、*alto*「高い」、*basso*「低い」、*buono*「良い」、*brutto*「醜い」、*gentile*「優しい」などに限定されている。ここで、《N+A》・

まず、 $\langle E_1 \rangle$ と $\langle E_2 \rangle$ の両方に複数の屈折変化が起こっているものとして、(28)や(29)のようなのものが挙げられる。

- 一般的に、NP内の形容詞は、名詞のGenderとNumberに一致する<sup>26)</sup>。これと同様に、(28)では、*forni*が男性名詞で複数の形態をとっていることから、〈E<sub>1</sub>〉の〈A〉が男性複数の形態である *alti* となっている。(29)では、*carte*が複数の女性名詞であることから、〈E<sub>2</sub>〉の〈A〉が女性複数の形態である *stracce* となっている。しかし、〈N+A〉・〈A+N〉複合語には、〈A〉や〈N〉にNumberの一致が起らず〈E<sub>2</sub>〉の要素だけが複数の語彙特性を示すものがある。

- 〈A〉が〈N〉を前位修飾している(30)の *biancospino* においては、複数の屈折は〈E<sub>2</sub>〉である *spini* だけに現れている。また、〈A〉が〈N〉を後位修飾している(31)の *palcoscenico* においては、〈E<sub>2</sub>〉の *scenico* のみに複数の屈折が出現する。特に、(31)はHeadではない〈A〉の要素に複数の屈折が起こっており、HeadとNumberの屈折位置が一致しないという証拠を示している。ここで、これらのNumberの屈折位置の違いを説明するために、(32)のような複合語形成過程における一つの仮説を提示して検証してみる。

- (32) ある統語連続が語彙化し、複合語としてLexicon<sup>26)</sup>に登録される過程において、幾つかの中間段階が存在する。この複合語形成過程における（語彙としての）確度度は、複合語のGenderやNumberに反映される。

まず、《N+A》複合語でType 1とType 3の二種類の複数形態を持つ複合語を取り上げてみる。

- (33) Type 1: porcospino 「ヤマアラシ」 → [[porco]<sub>N</sub> [spini]<sub>A</sub>]<sub>N</sub>  

$$\begin{array}{c} <+p1> <+p1> \\ \underbrace{\hspace{1.5cm}} \end{array}$$
Type 3: porco spino → [[porci]<sub>N</sub> [spini]<sub>A</sub>]<sub>N</sub>  

$$\begin{array}{c} <+p1> <+p1> <+p1> \\ \underbrace{\hspace{2.5cm}} \end{array}$$

Type 1では、<A>である<E<sub>2</sub>>の要素だけに屈折変化が起こっており、Type 3では、<E<sub>1</sub>>と<E<sub>2</sub>>の両方の要素に複数形態が現れている。Type 3のporco spinoの形態は、現代イタリア語では、余り多く用いられないとされる<sup>27)</sup>。このことから、(34)のような語彙化の過程が示唆され、これに従い複数形態は(35)のようになると考えられる。

- (34) [[porco]<sub>N</sub> [spino]<sub>A</sub>]<sub>NP</sub> → [[porco]<sub>N</sub> [spino]<sub>A</sub>]<sub>N</sub> → [[porcospino]<sub>N</sub>]<sub>N</sub>

- (35) [[porci]<sub>N</sub> [spini]<sub>A</sub>]<sub>NP</sub> → [[porci]<sub>N</sub> [spini]<sub>A</sub>]<sub>N</sub> → [[porcospini]<sub>N</sub>]<sub>N</sub>  

$$\begin{array}{c} <+p1> <+p1> <+p1> \\ \underbrace{\hspace{1.5cm}} \end{array} \quad \begin{array}{c} <+p1> <+p1> <+p1> \\ \underbrace{\hspace{1.5cm}} \end{array} \quad \begin{array}{c} <+p1> <+p1> \\ \underbrace{\hspace{1.5cm}} \end{array}$$

これらは、右側の構造に進につれて、語彙化のレベルが高くなっていることを示している。最初の段階の形容詞を含むNPの統語連続が、複合語としての中間段階に当たるType 3の形態で語彙化し、最終的に語彙的な複合語<sup>28)</sup>であるType 1の形態となる。このように、語彙化されると一語としての認識度が高まり、語末に複数の屈折が現れるようになる。次に、《A+N》複合語には、(36)に示した二種類の複数形態を持つものがある。

(36)
bassorilievo
「浅浮き彫り」
→
bassorilievi:
[[basso]<sub>A</sub>[rilievi]<sub>M</sub>]<sub>M</sub>

<+p l>
<+p l>

bassirilievi:
[[bassi]<sub>A</sub>[rilievi]<sub>M</sub>]<sub>M</sub>

<+p l>
<+p l>
<+p l>

この二種類の複数形態のうち、<E<sub>1</sub>>と<E<sub>2</sub>>の両方の要素に複数形態が現れる *bassirilievi* の形態は、衰退しているとされる<sup>29)</sup>。一方、<E<sub>2</sub>>の要素のみが複数形態となる *bassorilievi*は、現代イタリア語において一般的に用いられている。これは、複合語としての確立度が高くなったため、屈折要素が<E<sub>2</sub>>に移動していると考えられる。この語彙化の過程を複数形態で示したものが(37)である。

(37)
[[bassi]<sub>A</sub> [rilievi]<sub>N</sub>]<sub>NP</sub>
→
[[bassi]<sub>A</sub>[rilievi]<sub>N</sub>]<sub>N</sub>
→
[[bassorilievi]<sub>N</sub>]<sub>N</sub>

<+p l>
<+p l>
<+p l>

<+p l>
<+p l>
<+p l>

<+p l>
<+p l>

このようなことから、《N+A》・《A+N》複合語には、統語連続が語彙化して複合語が生成されるまでに一つの間接レベルが存在すると考えられる。この中間段階の複合語を Level 1、これより密接度の高い語彙的な複合語を Level 2とすると《N+A》・《A+N》複合語の語形成レベルは、(38)のようになる。

(38)
《N+A》・《A+N》複合語の語形成レベル

	《A+N》	《N+A》	複数形態
統語連続	[[E <sub>1</sub> ] <sub>A</sub> [E <sub>2</sub> ] <sub>N</sub> ] <sub>NP</sub>	[[E <sub>1</sub> ] <sub>N</sub> [E <sub>2</sub> ] <sub>A</sub> ] <sub>NP</sub>	[[E <sub>1</sub> ] <sub>x</sub> [E <sub>2</sub> ] <sub>y</sub> ] <sub>NP</sub>
	↓	↓	<div> &lt;+p l&gt; &lt;+p l&gt; </div>
<u>Level 1</u>	[[E <sub>1</sub> ] <sub>A</sub> [E <sub>2</sub> ] <sub>N</sub> ] <sub>N</sub>	[[E <sub>1</sub> ] <sub>N</sub> [E <sub>2</sub> ] <sub>A</sub> ] <sub>N</sub>	[[E <sub>1</sub> ] <sub>x</sub> [E <sub>2</sub> ] <sub>y</sub> ] <sub>N</sub>
	↓	↓	<div> &lt;+p l&gt; &lt;+p l&gt; &lt;+p l&gt; </div>
<u>Level 2</u>	[[E <sub>1</sub> E <sub>2</sub> ] <sub>N</sub> ] <sub>N</sub>	[[E <sub>1</sub> E <sub>2</sub> ] <sub>N</sub> ] <sub>N</sub>	[[E <sub>1</sub> E <sub>2</sub> ] <sub>N</sub> ] <sub>N</sub>
			<div> &lt;+p l&gt; &lt;+p l&gt; </div>



Level 1の段階は、 $\langle E_1 \rangle$ と $\langle E_2 \rangle$ における要素の結合の確立度が低く、複数形態も名詞句の統語連続と同様、 $\langle E_1 \rangle$ と $\langle E_2 \rangle$ の両方に起こる。一方、Level 2の段階になると語彙としての結合力が強くなり、一語としての認識も高くなることから、語末、すなわち $\langle E_2 \rangle$ の要素に複数形態が出現するということになると考えられる。

## 5. 《N+N》複合語の語形成レベル

《N+A》・《A+N》複合語と同様、左側主要部の《N+N》複合語<sup>30)</sup>のHeadと複数の屈折要素の位置から複合語形成過程について検証してみる。まず、《N+N》複合語の語形成レベルを示す(39)。

(39) 《N+N》複合語の語形成レベル

	《N+N》	複数形態
統語連続	$[[E_1]_N [P+E_2]_{PP}]_{NP}$	$[[E_1]_N [P+E_2]_{PP}]_{NP}$
	↓	$\langle +p1 \rangle$
Level 1	$[[E_1]_N [E_2]_N]_N$	$[[E_1]_N [E_2]_N]_N$
	↓	$\langle +p1 \rangle \quad \langle +p1 \rangle$
Level 2	$[[E_1]_N [E_2]_N]_N$	$[[E_1]_N [E_2]_N]_N$
	↓	$\langle +p1 \rangle \quad \langle +p1 \rangle \quad \langle +p1 \rangle$
Level 3	$[[E_1 E_2]_N]_N$	$[[E_1 E_2]_N]_N$
		$\langle +p1 \rangle \quad \langle +p1 \rangle$

統語連続としては、 $\langle N_1 \rangle$ と $\langle N_2 \rangle$ の間に前置詞(P)などの機能語（例えば、所有を意味する *di*、目的・方法を意味する *per*、様態を意味する *come* など）を介した構造が考えられる<sup>31)</sup>。これは、基本的に名詞+名詞という統語連続が有り得ないためである。Level 1は、 $\langle E_1 \rangle$ と $\langle E_2 \rangle$ の意味関係を示す前置詞が削除されN+Nの形態をとる初期のもので、複数形態がHeadすなわち $\langle E_1 \rangle$ に出現する段階であると考えられる。したがって、ここに属する複合語

は、Type 2/Type 3の形態をとるものが多く、複合語としての結合力の弱いものが含まれる。Level 2では、Level 1より結合力が強くなり、複数の屈折が語末の要素<E<sub>2</sub>>にも現れ、<E<sub>1</sub>>と<E<sub>2</sub>>の両方に複数の屈折が起こる。Level 3は、結合力がさらに強くなり、一語としての認識が高くなる<sup>32)</sup>ことから語末、すなわち<E<sub>2</sub>>だけに複数形態が出現する。したがって、Level 3は、ほとんどがType 1の形態で出現する。

## 6. 結論

以上、《N+A》・《A+N》複合語も含めて、イタリア語における《N+N》複合語の生成構造の考察を行った。複合語生成構造の分析に際しては、各要素の名詞の語彙特性であるGenderとNumberの屈折形態素に注目した。この結果、次のことが指摘できる。①複合語全体のGenderとHeadのGenderの位置は一致する。イタリア語における複合語は、概ね、左側の要素(<E<sub>1</sub>>)にHeadが生じる。②左側主要部の複合語の場合、Numberの屈折は<E<sub>1</sub>>、<E<sub>2</sub>>、<E<sub>1</sub>>と<E<sub>2</sub>>の3パターンあり、右側主要部の場合、<E<sub>2</sub>>、<E<sub>1</sub>>と<E<sub>2</sub>>の2パターンある。このことから、屈折要素が必ずしもHeadに出現しないことが理解される。③ある統語連続が語彙化し、複合語としてLexiconに登録される過程において、幾つかの中間段階が存在する。これを「複合語形成レベル」と呼ぶ。「複合語形成レベル」は、複合語のGenderやNumberに反映される。《N+A》・《A+N》複合語の場合、二つの語形成レベルが存在し、Level 1では、複数形態が<E<sub>1</sub>>と<E<sub>2</sub>>の両方に起こる。Level 2では、複数形態は語末(<E<sub>2</sub>>)に起こる。《N+N》複合語の場合、三つの語形成レベルが存在し、Level 1では、複数形態はHeadである<E<sub>1</sub>>の要素に起こる。Level 2では、複数形態が<E<sub>2</sub>>の要素にも生じるようになる。Level 3では、複数形態が、語末にだけ(<E<sub>2</sub>>)に生じる。

最後に、語形成レベルの異なる複合語が、別の部門で生成されている可能性について触れておく。これは、「語形成操作が語彙部門と統語部門の両方に認められる」<sup>33)</sup>という影山(1993)などの立場と関連する。本稿で扱った《N+A》・《A+N》複合語におけるLevel 2の段階の複合語や《N+N》複合語におけるLevel 3の複合語は、単純語と類似した性質を有していることから、語彙部門で生成(語彙的な語形成)であると考えられる。一方、名詞複合語におけるLevel 1の複合語は、統語連続と同じような文法規則(Genderや

Numberの一致など)に拘束されていることから、統語部門で生成(統語的な語形成)されていると考えられる。このことは、Numberの屈折変化などに顕著に現れる。つまり、語彙的な語形成では、単純語と同様、語末に屈折変化が現れ、統語的な語形成では、要素間のGenderやNumberの一致が見られる。このことを総合すると、(40)のようになる。

(40) 「複合語形成レベル」と生成部門

統語部門(統語的な複合語) : Level 1 《N+N》、《N+A》、《A+N》

語彙部門(語彙的な複合語) : Level 3 《N+N》・Level 2 《N+A》、《A+N》

このように考えると、屈折要素の位置に違いが起こる「複合語形成レベル」、生成部門の相違と言い換えることができると思われる。この「複合語形成レベル」と生成部門との関係を今後の課題としていきたい。

#### 註

\* 本稿は、1995年10月14日、岡崎学園国際短期大学で開催された第5回言語文化学会において、「イタリア語語形成に関する一考察」と題して口頭発表を行ったものに加筆・修正を施したものである。

\*\* 本稿は、平成7年度大阪女子短期大学研究助成費による研究成果の一部である。

<sup>1)</sup> "Ad ogni modo mettendo a confronto le lingue romanze con quelle germaniche che hanno maggiori capacità di composizione, dal punto di vista tipologico si può constatare il progressivo avvicinarsi dell lingue romanze alle lingue germaniche" (Sugeta (1989: 196))

- 2) 雑誌・新聞などのジャーナリズムにおける書き言葉には、多くのハイフン語が見られる。詳しくは、上野(1995)参照。
- 3) これらの多くは、ギリシア語・ラテン語起源であり、第一要素として出現するものに、*aero*-「空気・空・飛行機」、*baro*-「気圧」、*centi*-「100分の1・100」、*chilo*-「1000」、*crono*-「時間」、*foto*-、*idro*-「水の」、*micro*-「微少の・顕微鏡的な」、*moto*-、*multi*-「多数」、*neo*-「新しい・最新の」、*oltre*-「かなたに・越えて」、*tele*-「テレビ・遠い」、*termo*-「熱・温度」、*ultra*-「越えて」などがあり、第二要素としては、*-baro*「気圧・重量」、*-fero*、*-crono*などがある。
- 4) 英語からの外来語として、*pole-position*、フランス語からは*rendez-vous*などが挙げられる。
- 5) 英語における綴字上の差異は、個人的な趣向とされる。このことから、*flowerpot* (Type 1)、*flower-pot* (Type 2)、*flower pot* (Type 3)のように、三種類の表記で出現するような語も見られる。一般的に、アメリカ英語よりもイギリス英語の方が Type 2 の形式を好むとされる。
- 6) 竝木(1985: 78)にまとめられている英語における複合語の基準を以下に示す。
- 意味：全体の意味が部分の意味から論理的に推測できない場合
  - 音韻：第1強勢が最初の語に置かれ、第2強勢が2番目の語に置かれる場合
  - 形態：両者の間に他の要素を入れられない場合や、最初の語に修飾語（veryなど）が付けられない場合
- 7) Quirk *et al.* (1972: 1019) 参照。
- 8) Sugeta(1989)、Dardano & Trifone(1985)、Lepschy & Lepschy(1977)、菅田(1966)など。
- 9) 例文中の〈 〉は、第一強勢の位置を示す。
- 10) イタリア語では、英語と異なり、第一強勢は基本的に語末から二番目の母音に置かれる。
- 11) ①のラテン語からの複合語は、*manoscritto*「手書き」、*terremoto*「地震」など「名詞＋動詞」という語彙範疇から生成されている。②のゲルマン系言語からの翻訳借用については、英語から、*banconota*(〈banknote)」、ドイツ語から、*ferrovia*(〈Eisenbahn)「鉄道」などを挙げている。③の造語要素には、*filovia*(*filo*-)「トロリーバス」、*fruttivendolo*(-*vendolo*)「八百屋」、*pescivendolo*(-*vendolo*)「魚

屋」、*capoluogo*(*capo*-)「中心地」などを挙げている。

- <sup>12)</sup> イタリア語における派生語のHeadは、一般的に右側の要素に生じる。
- <sup>13)</sup> 一般的には、Predicate (述部、述語) は、「主語(subject)について陳述をなす部分」という意味で使用され、Attribute (限定語) は、「名詞(相当語)を主要語(head-word)とし、それを修飾する形容詞(相当語)」のことを意味する(『新英語学辞典』, 1982, 研究社)。
- <sup>14)</sup> *pesce cane*(Type 1)は、*pesce-cane*(Type 2)や*pesce cane*(Type 3)の形態でも出現し、綴字の違いが複合語の基準とはならないことの一つの証拠を示している。
- <sup>15)</sup> 厳格に言うとは、Predicateの方には、動的な叙述の省略が起こっている。例えば、*donna cannone*における<大きな>や*discorso fiume*における<流れる>。しかしながら、<E<sub>1</sub>>と<E<sub>2</sub>>の要素間の意味関係は、どちらも直喩関係にあることに変わりはない。
- <sup>16)</sup> さらに、Sugeta(1989)では、Sintagmaについて各要素の意味機能からApposizioneを4つ、Dipendenzaを3つに下位分類している。彼はSintagmaを語彙レベルではなく句レベルの形式として取り扱っている。したがって、これらの中には、*sindaco La Pira*「ラビーラ市長」などの語も含まれている。
- <sup>17)</sup> 音韻的に二か所第一強勢を持つとされるType 2/Type 3について、菅田(1966: 34)には、「音声学的には後置の名詞のstressの方が前置の名詞のものよりも多少強い」とあり、同種の第一強勢が連続しないことが述べられている。
- <sup>18)</sup> Dardano & Trifone(1985: 340)の定義をほぼ採用した。“La composizione consiste nell’unire almeno due parole in modo da formare una parola nuova, che prende il nome di composto (o parola composta)”
- <sup>19)</sup> Scalise(1988)では、右側にHeadが生起するものは、ラテン語起源の複合語であるとしている。また、結論として、複合語におけるHeadの位置が基本的語順や複合語形成とは異なる構造原理によって決定されることを指摘している。
- <sup>20)</sup> Lieber(1981)、Williams(1981)、Selkirk(1982)参照。
- <sup>21)</sup> 右側にHeadが出現する複合語は、主にType 1の形態で出現するが、本文で示したように*carta moneta*などType 1以外の形態で出現するものも僅かながら存在する。
- <sup>22)</sup> この他に、複数の屈折変化を起こさない無変化の名詞も存在する。
- <sup>23)</sup> 右側主要部の複合語において、複数の屈折が<E<sub>1</sub>>にだけ起こる例は見られなかった。

このことは、HeadにNumberの屈折変化が起こるという一つの証拠となっている。

- <sup>24)</sup> 名詞を前位修飾する形容詞としては、*un brutto quadro*「下手な絵」の*brutto*、一方、後位修飾するものとしては、*una tavola rotonda*「丸いテーブル」の*rotonda*などが挙げられる。一般的に、〈A〉を含む名詞複合語の場合にも、この形容詞の修飾位置の規則が適用される。
- <sup>25)</sup> 例えば、男性名詞*ragazzo*に*onesto*という形容詞を付加する場合、単数であれば、*ragazzo onesto*、複数であれば、*ragazzi onesti*になる。同様に、女性名詞*ragazza*の場合、単数であれば、*ragazza onesta*、複数であれば、*ragazze oneste*となる。このように、形容詞は名詞のGenderとNumberに一致する。
- <sup>26)</sup> ここでいう、Lexiconは、「個々の単語の意味的・統語的・音韻的情報を登録している部門」を指す。
- <sup>27)</sup> *Il Grande Dizionario Garzanti della Lingua Italiana*. 1994. Garzanti. には、rar. (希) とある。
- <sup>28)</sup> 綴字上は、Type 1の形態で出現することが多い。
- <sup>29)</sup> *Dizionario d'ortografia e di Pronunzia*. 1981. ERI. には、antiqu. (古くさい) とある。
- <sup>30)</sup> 右側主要部の複合語は、その生成過程が現代イタリア語のものと異なるため、同一に扱うことができない。
- <sup>31)</sup> すべての〈N+N〉複合語が前置詞の省略で生成されているとはいえないが、〈N<sub>1</sub>〉と〈N<sub>2</sub>〉の要素間の意味関係からこのようなことを類推した。機能語が省略されずに、残ったまま複合語になったものとして、*pomo d'oro* → *pomodoro*「トマト」などが挙げられる。
- <sup>32)</sup> 固定化の証拠として、〈E<sub>1</sub>〉にTroncamento (語尾切断) が起こっている語がしばしば見られる。Troncamentoが起こっている複合語としては、*granturco*「トウモロコシ」、*cavolfiore*などが挙げられる。
- <sup>33)</sup> 影山(1993: 6)などでは、語形成操作が語彙部門と統語部門の両方で起こるというモジュール形態論を提案している。

## 参考文献

- Carey, G.V. 1953. *American into English*. Heinemann.
- Dardano, di M. & P. Trifone. 1985. *La Lingua Italiana*. Zanichelli.
- Lepschy, A.L. & G. Lepschy. 1977. *The Italian Language Today*. New Amsterdam.
- Lieber, R. 1981. *On the Organization of the Lexicon*. Indiana University Linguistics Club.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
- Scalise, S. 1988. *The Notion of 'Head' in Morphology*. in Booij, G. & J. Marle (eds.) *Yearbook of Morphology*. Foris. pp.229-245.
- Selkirk, E. 1982. *The Syntax of Words*. MIT Press.
- Serianni, L. 1989. *Grammatica Italiana: Italiano Comune e Lingue Letteraria*. UTET.
- Sugeta, S. 1989. *Il Sintagma Nominale del Tipo <<parola-chiave>> in Italiano e nelle Lingue Romanze*. Società di Linguistica Italiana 27. pp.195-212.
- Williams, E. 1981. *On the Notions 'Lexically Related' and 'Head of a Word'*. Linguistic Inquiry 2. pp.245-274.
- 影山太郎. 1993. 「文法と語形成」. ひつじ書房.
- 菅田茂昭. 1966. 「現代イタリア語における sintagma <<名詞+名詞>>」. 早稲田大学紀要第5号 pp.33-79.
- 竝木崇康. 1985. 「新英文法選書第2巻 語形成」. 大修館書店.
- 上野貴史. 1995. 「イタリア語における合成語の構造: ハイフン語とその主要部」. 言語文化学会論集 第5号. pp.21-43.